

# 愛媛労災病院ニュース

愛媛労災病院広報紙第1号  
2003年7月5日発行  
発行人：病院長 西岡幹夫

## 【愛媛労災病院の理念】

当院は働く人々のために、  
そして地域の人々のために  
信頼される医療を目指します



## 「<sup>かい</sup>隗より始めよ」

愛媛労災病院長 西岡幹夫

我々の病院は1956年、内科、外科、整形外科の3診療科、50床をもって開設され、その後、段階的に大きくなり、現在、19診療科、306床の総合病院にまで発展しました。

この間、労働災害や職業病など被災者の迅速、かつ適切な診療を図ることを使命とし、さらには、最先端の医療器具を駆使して、地元の中核病院としてそのニーズに対応して参りました。

過去30年間における医療の進歩はまさに驚くものがあります。しかし、最近多くの問題が噴出し、金融ビッグバン、医療ビッグバンが報道される中、医療制度の大変革が進行中と言えましょう。

我々の病院においては、平成14年は特に多事多難の連続だったようです。我々は皆、健全な病院の発展を願っています。そのためには、職員の和はもちろんのこと、やはり、若手の意見をくみ上げることが大切でしょう。宮本眼科部長や稲見精神科部長との雑談中、たまたまこの話になり、「病院ニュースなどにして流して、現場を盛り上げよう」ということとなり、まず両先生にその企画を始めて頂くことになりました。

「物事はまず言い出した者がやり始める。」という喩えがあります。「先従隗始（十八史略、春秋戦国）ご存知の「先ず、隗より始めよ」です。中国の戦国時代、郭隗（燕の賢人）が燕の昭王に「先ず私を採用して下さい、郭隗のようなつまらない人を用いるなら、我も我もと更に天下の人物が集まる」と進言しました。ホラチウス（ローマ帝政初期の詩人でアリストテレスと並び称される）の書簡集に「A good beginning makes a good ending」とあり、これらのアイディアは紀元前からあったのでしょうか。

終わりに、本病院ニュースが単なる情報の伝達だけでなく、皆様の意見を反映する広報紙として定着し、更には、病院運営や自己研修の縁となれば、本企画の発起人の一人として望外の幸せであります。

## 整形外科紹介

砂金光藏部長

愛媛労災病院の整形外科は5人の医師で構成され、日々の臨床に取り組んでいます。整形外科の治療担当範囲は非常に広く、一般外傷はもとより、脊椎、関節、手、末梢神経、筋など多岐に及び、それぞれに専門的な知識と治療技術が要求されます。昨今は、特に整形外科の分野においても医学の進歩が著しく、一人の医師がすべての分野を専門的に治療するのは困難な時代に直面しています。私達の整形外科では、早くからそれぞれの専門分野のエキスパートをそろえて、最先端の知識と技術を導入して、地域医療においても最新の治療ができるよう、大学病院と協力してスタッフの配置をおこなっています。

部長の砂金は主として脊椎外科と関節外科を、木戸部長は手の外科と外傷外科を、目副部長は関節外科と外傷外科、米村副部長はリウマチ外科、末梢神経、一般外傷など、越智医師は外傷を中心とした一般整形外科を専門として治療に当たっており、全整形外科の幅広い分野で高水準の治療を行っていると自負しており、愛媛県の東予地区では中核的な役割を果たしています。

また、最近では術後早期の社会復帰を目指して、内視鏡やイメージを駆使した低侵襲手術がトピックとなっており、当科でも関節疾患や末梢神経疾患には早くから導入しています。また、脊椎外科の分野においても内視鏡を用いた低侵襲手術が行われるようになっており、愛媛労災病院整形外科では県内に先駆けて、腰椎椎間板ヘルニアに内視鏡手術を導入しました。今後は脊椎手術の広い分野に応用が可能となるでしょう。

年間手術症例は600～800例におよび、骨折を中心とした外傷はもとより、脊椎手術(頸髄症、腰椎分離・すべり症、腰部脊柱管狭窄症、腰椎椎間板ヘルニア、脊髄腫瘍、脊髄損傷、その他)、手の外科(切断指(肢)再接着術、機能再建術、関節形成術、骨壊死、その他)、関節外科(人工股・膝関節、靭帯再建、関節形成術、骨壊死、半月板手術など)、末梢神経障害による機能再建、骨腫瘍、など特定の疾患に偏らず幅広く治療を行っています。

外来もスポーツ、リウマチの特殊外来を開設し、地域医療に貢献しています。今後も医療水準の向上と維持に努めて地域医療の一端を担いたいと一同切磋琢磨して治療に取り組んでいます。

## 検査科紹介

林原 正技師長

検査科は、16名のスタッフと部長1名、総勢17名のメンバーで構成されています。

殆どのメンバーが、昔は美男子、昔は美少女でしたが、今はだいぶくたびれ、口は雄弁になり、喋りだすと止まらない、手と足はほとんど動かない状態になっています。しかしながら、長年の業務経験を生かし、平成13年の秋に現在の検査システムを構築し、臨床支援を積極的に行っています。

システムの大きな特徴は、

検体が検査室に届いてから80数項目の検査を30～60分以内に報告し臨床支援を行っていること。

採取管の準備が出来るようになったこと。(バーコード貼付した採取管を準備して、採血時のミス防止等ができる)

オンラインでデータの搬送ができ、画面での参照、報告用紙の自動印字等ができるようになったこと等があげられます。

検査はややもすると、患者不在(極端に言えば、外来では患者さんがお家に着いたころにデータが出る、重症患者では亡くなってからデータが出る)診療診察の直接サポートが出来ない、念のために、ついでに採血して検査しておきましょう...、そんなところがあったのも事実です。

しかし、今では違います。病気の早期発見、早期治療ができるように検査データを迅速に返し、病態が急変したら直ちに検査データを報告し、科学的な情報に基づいて的確な診断、適切な治療が出来るように貢献しております。

チーム医療の一員として、院内になくはならない検査室になるように頑張っています。



生化学自動分析装置(日立7170)で43項目の検査をしています

# 眼科紹介

## 遠藤理恵医師

当院眼科は、故大石省三名誉院長のころから愛媛県東予地区の眼科基幹病院としての役割を担ってきました。カバーするエリアは現在では今治東部から川之江、徳島県北部にわたりその人口はおよそ60万人、眼科手術の施行数、多岐にわたる手術内容の豊富さは、愛媛県では群を抜いて一位、中国・四国地方のなかでもトップクラスを誇っています。

白内障・緑内障手術はもちろんのこと、以前は失明率の高かった網膜剥離、網膜動静脈閉塞症、加齢性黄斑変性、糖尿病網膜症などの難治性網膜硝子体疾患の治療成績も向上、最近では月1例ペースでの角膜移植や、4月にはエキシマレーザーによる近視矯正手術(LASIK)の施行など眼科全ての分野の先端医療導入に積極的に取り組んでいます。

また最近の疾病傾向として、糖尿病・動脈硬化・高血圧・肥満などの成人/高齢者特有の疾患患者の増加と、アレルギー、ドライアイ、VDT症候群などの現代病による若年/壮年患者層の増加の二層構造を形成してきている印象です。

### 1. 網膜 - 硝子体疾患

難治性網膜剥離、増殖性糖尿病網膜症など放置すれば失明にいたる疾患や、1990年までは保存的治療しかできず、高度の視力障害を残した黄斑円孔、糖尿病/静脈閉塞に続発した黄斑浮腫などの黄斑疾患

に対する手術医療の可能性を追求、治療成績の向上と高度のQuality Of Vision(QOV)獲得を目指しています。

### 2. 角膜移植

臓器移植法制定以降、国民の関心は大きいものの、角膜移植手術待機患者vs提供角膜数の需給バランスは解消せず、現在愛媛県では手術申し込みから施行まで平均5年待ちの状況です。当院では現眼科部長が愛媛アイバンクの理事をつとめていることもあり、日本全国の広域アイバンクや海外アイバンクに積極的に働きかけ、安定した供給のもと角膜移植を行っています。

### 3. 屈折矯正手術

エキシマレーザーという特殊レーザーを用いミクロン単位で角膜を形成、近視、遠視、乱視を矯正する屈折矯正手術は、1998年の米国FDAの認可以降、全世界で爆発的に手術が施行され、21世紀の眼科手術の一大骨格を形成するものと予想されています。当院眼科でも4月に30例を治療、95%以上の精度で患者の視力矯正目標を達成しました。

### 4. VDT症候群

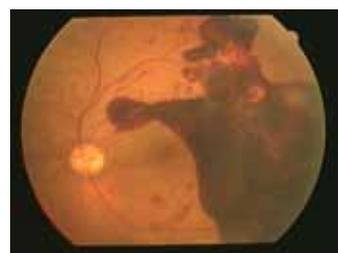
コンピューター使用により眼~全身の疲労を引き起こすVDT症候群は、21世紀文明社会の労災疾患と位置づけることができ、勤労者医療のカテゴリーとしてその予防、診断、治療が期待されています。我々は従来からVDT症候群とドライアイ、屈折異常との関連性につき積極的にデータ収集・検討を行っており、当院で今年度立ち上げられる「勤労者のための感覚器センター(仮称)」の一翼として眼科的役割を担っていく予定です。



網膜剥離手術前



網膜剥離手術後



増殖糖尿病網膜症手術前



増殖糖尿病網膜症手術後



角膜移植手術前



角膜移植手術後

## 愛媛労災病院センターのご紹介

### 働く女性メディカルセンターの活動 産婦人科部長・宮内文久

働く女性メディカルセンターの仕事は大別して二つに分けられます。一つは学術部門で、夜間労働がホルモン環境に及ぼす影響を検討しています。季節発情を示す動物では松果体から分泌されるメラトニンが、日照時間の変化を受けて性腺機能の調節を行っています。網膜から入ってくる光の量によってメラトニンの分泌が変化することは、動物と異なりヒトでは起らないと推測されていました。しかし、夜間のナースステーションの明るさ程度で、本来なら夜間に高値を示す血中メラトニン濃度の上昇が抑制されることを観察しました。また、下垂体から分泌される性腺刺激ホルモンの量は、血中メラトニン濃度と密接に関連していることも観察しました。これらのホルモン環境の変化により、昼間勤務の教師や事務員に比べて夜間も働く看護師やホステスに不規則な月経周期や不正出血の発生頻度が高くなるのは頷ける結果でした。

二つ目は医療情報の提供であり、講演会やメール相談などを行っています。昨年度は小・中学校や高校で性教育に関する講演を19件、自治会や婦人会で健康に関する講演を7件行いました。また、インターネットによるメール相談が274件、電話相談が8件ありました。外来玄関近くのコーナーでは第2と第4木曜日の午前中無料の面接相談を行っており、昨年度は29件の相談がありました。これらの活動により平成13年に日本家族計画協会会長賞を、平成14年には日本思春期学会地域活動賞をいただきました。

### 勤労者予防医療部 放射線科部長・篠原 功

がんについて、心筋梗塞や脳梗塞などの動脈硬化性疾患は日本人における主要な死因となっています。これら動脈硬化性疾患の発生には、(1)肥満(特に内臓脂肪型肥満)(2)高血圧(3)糖尿病(4)高脂血症をあわせ持つ病態が大きく関与するとされ、「死の四重奏」といわれております。これに喫煙が加わると、「死の五重奏」とよばれて更に危険な状態となります。また、これらの疾患は別名生活習慣病ともよばれるように、食事の内容や運動不足などがその発症の要因となっています。

勤労者に急増しているこれらの病態に予防面から積極的に対応するため、愛媛労災病院では勤労者予防医療部を平成15年4月より設置いたしました。健康診断の検査結果に気になる項目(肥満、血糖値、コレステロール、中性脂肪、高血圧など)があった方や、最近体重が増えた、あるいは外食が多い食事をされたり、運動不足を感じている方などは、ぜひ勤労者予防医療部にご相談ください。管理栄養士、理学療法士が、食事指導および運動指導を行い生活習慣の改善のお手伝いをいたします。また、今後講習会なども予定いたしておりますので、その際はぜひご参加くださるようお願いいたします。

### メンタルヘルスセンター 精神科部長・稲見康司

1. 勤労者のMental Healthの向上が第1の目的であり、企業の産業医を通じて、あるいは勤労者による直接の精神保健相談に対応する。
2. 何らかの精神障害を有するが、直接精神科の病院やクリニックを受診するには抵抗を感じている一般の方を対象に、精神保健相談にも応じる。

#### 利用手順

毎週木曜日、午後2～4時に精神科医師が待機している。利用に先だて、医事課を通じての予約が必要である。

#### 今後の展開について

勤労者の睡眠覚醒障害に第1義的な原因があると考えられている産業事故による経済的損失は無視することができないほどに大きいと見積もられている。たとえば、Three Mile Islandの原子力発電所における放射能漏れ事故や、Alaska沖の巨大タンカー座礁事故はいずれも監視要員の眠気による不注意がきっかけであったことは、アメリカ政府の公報に記載されている。公表されていないものの、ウクライナにおけるチェルノブイリ原子力発電所の事故も同様の問題があったと、多くの睡眠学者は考えている。また、交通事故の発生頻度の日内変動についての研究からも、労働の際の眠気が重大な事故につながることを示唆されている。将来的には、愛媛労災病院Mental Health Centerは、勤労者の睡眠覚醒障害センターとしての特色を有する形での展開を考えている。

## 第1回愛媛労災病院TQM活動発表会開催 クリニカルパス委員会

平成15年5月30日(金)院内TQM活動発表会が開催されました。

広い分野での医療の質の向上に向けた取り組みについて発表するという趣旨で開催され、院内の各部門、部署から9題の発表がありました。

発表内容は パス委員会の活動(パス委員会)、循環器のパスについて(循環器科)、検査部のパスへの参加(検査科)、看護業務改善について(看護部)、MRSAが検出されたらどうするか(薬剤部)、肺気腫を有する残胃癌患者に対する周術期理学療法(リハビリテーション科)、NST実践病院を見学して(栄養管理室)、勤労者予防医療部の役割(勤労者予防医療部)、病院機能評価について(医事課)でした。

当日は台風4号が四国に上陸しようかという空模様の中、なんと182人に参加して頂きました。各部門の有意義な活動を分かりやすく発表して頂きまして、久しぶりに眠くならない発表会でした。会場からも鋭い質問、意見がたくさん出て、関心の深さがうかがえました。「他部署の発表が聞けてよかった」という意見も多く、これからもこの発表会を続けていきたいと思っております。なお、今回は部屋に入れない人や立ち見の人が多く、その点は会の運営に問題があったと反省しております。



### 紙名公募のお知らせ!

院内広報紙は、暫定的に「愛媛労災病院ニュース」というタイトルで創刊しました。編集会議では、親しみやすい紙名を公募して採用し、次号からそれを利用しようということになっております。第1号に折り込みの用紙に必要事項を記入の上、お近くの編集メンバーにお渡し下さい。採用された紙名の命名者には、庶務課から豪華(?)粗品が進呈されることとなっております。

## 医療安全院内パトロール 第二外科部長・味生 俊

医療安全対策委員会の活動は以下のごとくです。

- (1) 1カ月毎のインシデントおよびアクシデントレポートの検討と対策の立案。
- (2) 年2回の全職員を対象としたリスクマネジメント関連の研修会の開催。
- (3) 年2回の医療安全院内パトロール。

今回は、5月(26日～30日の5日間)に実施された院内パトロールについてご紹介します。

目的は、

1. 安全確保の充実と検証
2. 職員のリスクマネジメント意識の向上・医療安全対策マニュアルの重要性

の認識を浸透させることです。

総勢46人で院内の全部署(16部署)を1部署1時間の割で5日間かけてパトロールしました。

パトロール隊員は、それぞれの部署用のチェック表に問題点を記載し集計。現在、全データを検討し対策案を立案中です。最終的には、6月の医療安全対策委員会で検討し、可及的早期にパトロールの結果と対策案を、各部署にフィードバックする予定です。

院内パトロールは、今回で2回目。まだまだ、十分な成果があげられているとはいえない状態です。しかし、これにより現場の職員では案外気が付かない安全上の欠点が、第三者の目を通して浮き彫りにされ、監視されることにより少しでも多くの職員が、リスクマネジメントに関心を持ってくれるものと期待しているところです。

最後に、パトロール隊の皆様、ご苦労様でした。各部署の職員の皆様、ご協力有難うございました。



### 院内緊急時の対応についての研修会 集中治療部部長・西山芳憲

5月23日(金)に病院機能評価 - 第4領域・診療の質の確保(適切な診療活動の展開)の一貫として、「院内緊急時の対応」と題して全体研修会を行った。病院職員156名が参加した。2000年アメリカ心臓学会のガイドラインに準拠し、下記の内容で、器具を用いない心肺蘇生法(BSL)・器具や薬物を用いた心肺蘇生法(ALS)の一部に関し、西山部長による講義および実習を行った。

講義内容: 院内救急時の対応

誰かが倒れていたらどうするか?

1. 意識の確認: 軽く叩くか、手を握って、呼名開眼するのか?
2. 呼吸の確認: 胸は持ち上がっているか、呼吸は聞こえるか、手のひらで呼吸は感じられるか?
3. 循環サインの確認: 人工呼吸2回の後、自分で呼吸しているか、咳をするか、体動があるか、頸動脈は触れるか?

救急蘇生のABC

A: 気道確保・頭部後屈・あご先挙上

B: 人工呼吸・鼻孔閉鎖・吹き込み時の胸郭上昇、1~2秒かける。

C: 心マッサージ・胸骨の下1/2を両手で4~5cm圧迫、術者の手はまっすぐ伸ばし、100回/分の速さ

参加した医師5名を対象として、挿管人形を使用して、気管内挿管の練習を施行した。

研修を終えての感想

1. 予想以上の人数が集まり、驚いた。多くの職員が関心を抱いているのがわかった。ただし、医師の出席が少なく、医局は危機感が希薄なのではないかと感じた。
2. 除細動器は各階にひとつは必要と思われるが、当院では4・6・7階には置いていないので、改善が必要だと感じた。
3. 研修会は、今後も継続する必要があると感じた。



#### 平成15年度永年勤続者の表彰について

7月1日の事業団の設立記念日にあたり、当院では下記のとおり、15名の方が永年勤続に対する表彰を受けられました。多年にわたり病院の発展に寄与されたご功績を称え、心からお祝い申し上げます。

記

#### 30年勤続表彰者

看護師	田邊 泉
看護師	橋本起久子
看護師	大西八重子
准看護師	加藤 恒子
会計課長	新城 俊雄

会計課員	加藤 正雄
薬剤部長	宮崎 哲一
調理師	滝本 教生

#### 20年勤続表彰者

心臓血管外科部長	友澤 尚文
耳鼻咽喉科部長	辻田 達朗
看護師長補佐	土居しのぶ
看護師長補佐	河村 寿子
看護師	和田 育子
看護師	平 尚子
看護師	豊田 光恵

#### 編集後記

西岡院長の御発案で、愛媛労災病院も「広報紙」を発行することとなり、今回創刊第1号をお届けできることになりました。編集委員会での議論を経て、基本的には院内向けに毎月1回発行し、3カ月に1回は院外広報を目的に、お世話になっている関係先にも配布させていただくこととなり、創刊号は院

外広報紙の第1号でもあります。

何かと業務多忙の中、ご寄稿いただきました皆様方にお礼を申し上げたいと思います。紙面の都合で第1号に掲載できずに積み残しとなった原稿も出てしまい、申し訳なく思っております。頂戴しました原稿は、必ず次号以降に掲載させていただきますので今回はご容赦下さいますようお願い申し上げます。(Y.I.)

#### | 広報紙編集メンバー

| 病院長(西岡幹夫), 医局(宮本和久, 稲見康司, 宮内文久), 看護師(峰平一二美, 土居しのぶ), 庶務課(佐藤 求, 稲富小百合), 医事課(秋岡裕子), 薬剤部(宮崎哲一), 放射線科(高松克征), 検査科(林原 正), リハ科(多田羅昭二), 栄養管理室(中野恵子)